

## 自己評価報告書

平成 23 年 4 月 12 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720198

研究課題名（和文） 近世フランス都市社会における「他者」との共存に関する研究

研究課題名（英文） A Study of coexistence in the town of Early Modern France

研究代表者

小山 啓子 (KOYAMA KEIKO)

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：60380698

研究分野：近世フランス史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：近世フランス・リヨン・都市・外国人・同郷団・帰化・遺産没収権・市民権

## 1. 研究計画の概要

1998年にユネスコの世界遺産に登録されたリヨンの旧市街は、中世末期から近世初期にかけてのイタリア文化の影響がいかに大きかったかを如実に物語っている。旧市街の中心にあるリヨン歴史博物館の建物は、フィレンツェ人であるガダーニュ家の邸宅であった。大司教座教会サン=ジャン大聖堂と大市の決済が行われた両替広場は500m未満の距離にあり、大聖堂からこの広場に至る歩いてわずか10分程度の街区にリヨンを代表する聖俗のエリートたちの邸宅が並んでいるのであるが、リヨンの外国人はいわゆる外国人街を形成することなく、その中心地に混在して居住した。

フランスでは外国人が財産を残して死去した場合、その相続権は国王にあるとする遺産没収権が定められており、死後自らの子弟に財産を相続するには帰化が必要であった。リヨンに居住した外国人は、商取引や政治の動向に応じて数年で退去していく者たちがいる一方で、市民権のみならず帰化状を取得して、市政運営に携わったり、官職を手にしてフランスの上層社会に深く根を下ろしていく者たちもいた。

都市に居住する外国人にとって、帰化が有した意味とは何であったのか。実際、国王は都市の外国人に対してどの程度遺産没収権を行使できたのか。いかなる条件の下で外国人は帰化を望み、申請するに至ったのか。どのような政治的・社会的状況を背景に、どのような個人的・家族的戦略をもって、帰化という「国家」制度を利用したのか。史料としては、セネシャル裁判所及びリヨン財務局関係

史料の中に保存されている帰化登録簿を中心に調査・分析した。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 16世紀のリヨンにおけるイタリア人の帰化状申請について、問題点と研究史の整理を行った。

(2) 計画を実施する上で必要な史料の存在状況と史料の性質について調査した。対象となった史料は、リヨン市文書館とローヌ県文書館に所蔵されている、市参事会審議録、会計簿、セネシャル裁判所史料、リヨン財務局関係史料、帰化登録簿などである。

(3) リヨンに在住した外国人の出身地別分布と同郷団の形成について、明らかにした。フィレンツェ同郷団に関しては、同郷団規約の分析を行った。

(4) 近世フランスにおける帰化申請の手続きを明らかにした。また、リヨンで帰化を申請した外国人の集合的特徴を捉えるために、帰化登録簿などから判明した情報を整理し、分析している最中である。

(5) 宗派問題と16世紀後半における反イタリア感情の醸成について、研究の中間報告を行った。

## 3. 現在までの達成度

③やや遅れている

理由

平成21年度と22年度に研究代表者が2度の産休・育休を取ったため、予定していた海外調査を実施することができなかった。この間

題に関しては、文書館からマイクロフィルムをコピーしてもらって取り寄せたり、フランスの研究者とメールで情報交換することによって埋め合わせている。

#### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 今後も引き続き、必要な史料は可能な限りマイクロフィルムかデータの形で取り寄せて、解読を急ぎたい。また、その分析の際には、リヨン第2大学の研究者とメールで意見交換しながら進めていきたいと考えている。

(2) 帰化を準備するのは複数の次元に及ぶ多様な背景があり、祖国やホスト社会の政治的圧力、雇用機会、家族戦略、財産保護欲求など、複合的要因が帰化の直接・間接の契機となったことが今までのところ判明している。では、帰化を選択しなかった外国人に対して、国王は都市の枠を超えて、実際どの程度遺産没収権を行使できたのか。この点をさらに明らかにすることで、何が外国人に王国への法的帰属を選択させたのかをより具体的に検討することができるであろう。

(3) 都市に存在していた外国人同郷団に関しては、これまでにフィレンツェ同郷団の規約を検討したが、同郷団と社会の関わりをさらに深く分析する必要がある。行政や社会福祉事業に対する同郷団の参入・貢献について、さらに史料を読み込んでいく。

(4) これまでの成果は学会発表等で公表してきたが、それを論文として発表する。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 小山啓子「近世初期のリヨンにおけるイタリア人」、関西フランス史研究会、2008年。
- ② 小山啓子「近世フランスの社会において「他者」を受容すること」、倫理創生研究会シンポジウム、2008年。
- ③ 小山啓子「16世紀のリヨンにおけるイタリア人——帰化問題を中心に——」、「中・近世ヨーロッパにおけるコミュニケーションと紛争・秩序」研究会、2010年。

〔図書〕(計2件)

- ① 佐藤彰一、中野隆生、小山啓子(その他約7名)『フランス史研究入門』山川出版

社、2011年7月予定(初校まで終了)。

- ② 南塚信吾、秋田茂、高澤紀恵、小山啓子(その他約30名)『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2011年9月予定(原稿提出まで終了)。

〔その他〕

- ① 翻訳、ジャック・ボタン「商人文書、商業関係文書——中世末期から近世にかけてのフランスと西欧——」、国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『中近世アーカイブズの多国間比較』岩田書院、2009年、pp. 227-241。